様式2

令和７年度　学校評価の４点セット

注：東渓SDL
自己調整学習
Self-Directed　Learning

１学期

4月　4日版

第3回検証・改善　（1回目4/11、2回目6/9振り返り）

1学期
7月17日

日田市	立	東渓中	学校

【学校の教育目標】　主体性を発揮し、よりよく生きようとする生徒の育成　～自律した学習者の育成を目指して

【育成を目指す資質・能力】　言語能力

重点目標	達成指標		重点的取組	取組指標	実施率	評価	資質・能力の3つの柱	チーム	R6年度の成果・課題	確認・検証・改善【　３回目】 取組指標に対する **取組状況の確認** 実施率	取組状況（エビデンス）	達成指標に対する **達成状況の確認** 達成率	達成状況（エビデンス）	達成指標・取組指標の妥当性を **検証**	**改善方法**
教科等で必要な語句・表現の習得	○ 平日「東渓SDL」（自分で決める家庭学習ルール）を守って家庭学習に取り組んだと答えるA評価の生徒を**４０%以上**にする。→53.5% 単元テストで正答率 ○ **８０%以上**の生徒の割合を**３０パーセント以上**にする。→36.6% ※家庭の取組状況、達成状況については1学期において検討中（CS会議）	学校	○ 「東渓SDL」（自分で決める家庭学習ルール）の実行、習慣化に向けての支援。	○ 生徒は「東渓SDL」自分で決める家庭学習ルール）を設定し、**学期末**にふり返りを行う。			生きて働く「知識・技能」の習得	○木下　櫻井　長谷部	○今年度はチームとしての機能は果たせていなかったので、来年度はチーム会議等の時間の設定が必要。	100%	◇生徒は「東渓SDL」(自分で決める家庭学習ルール)を設定し、学期末にふり返りを行う。 →「東渓SDL」設定と学期末のふり返りを行った	133% 120%	◇平日「東渓SDL」(自分で決める家庭学習ルール)を守って家庭学習に取り組んだと答えるA評価の生徒を40%以上にする。 →53.5% ◇単元テストで正答率80%以上の生徒の割合を30%以上にする。→36.6%	◇平日「東渓SDL」(自分で決める家庭学習ルール)を守って家庭学習に取り組んだと答えるA評価の生徒を55%以上にする。 ◇単元テストで正答率80%以上の生徒の割合を40%以上にする。	◇単元テストについては、全校で平均すると達成指標を越えたが、学年による差がある。 ⇒更なる徹底へ ◇1学期の目標と達成状況をふまえて「東渓SDL」2学期バージョンを設定させるか。（要　検討）
		家庭	○ 「東渓SDL」（自分で決める家庭学習ルール）を中心とした家庭学習習慣定着のための支援。	○ 保護者は学習習慣の定着を図るため、**学期に2回**「東渓SDL」について話し合う時間を設定し、親子でふり返りを行う。						100%	保護者アンケート実施	100%	◇家庭学習定着について、学校と協働し、「自律した学習者」の視点を共有する傾向が高まっている。(アンケートの記述内容から)	◇　継続予定	◇更なる保護者と協働体制の強化を行う(CS, PTA 活動等)
習得語彙を活用し、自分の考えを言語化し伝え合う力の育成	○ 単元テスト、定期テストで「論理的に解答する」問題の平均正答率**６割**以上の生徒が**５０%以上** ○ 授業等で「自分の意見を伝えることができた」の**完全肯定率６０%以上**	学校	○ 各授業において、習得語彙を活用して生徒自身の考えを言語化（文章、口頭）させ、内容を目的、場面、状況に照らして評価する ○ 短学活や人間関係プログラムを計画的に実施する	○ 各教員は、単元ごとに生徒が習得語彙を活用した記述「ふりかえり」を行わせ、相互に伝え合う活動を実施する ○ 各学級の短学活で「共感を育む」プログラムを実施し、月１回は全校で取り組みを行う			未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」	○衞藤　津髙　浅山	○今後は、記述問題の正答率の向上が学力検査等での「活用力」に反映できるよう「まとめ」や「振り返り」の方法について研究する必要がある。	75%（教員アンケートから）	◇各教員は、単元ごとに生徒が習得語彙を活用した記述「ふりかえり」を行わせ、相互に伝え合う活動を実施する ◇各学級の短学活で「共感を育む」プログラムを実施し、月1回は全校で取り組みを行う→1分間スピーチや生徒集会でのスピーチ、人間関係づくりプログラムを実施した。	104% 95.2%	◇単元テスト、定期テストで「論理的に解答する」問題の平均正答率6割以上の生徒が50%以上 →52.2% ◇授業や短学活、生徒集会等で「自分の意見を伝えることができた」の完全肯定率60%以上 →57.1%	◇おおむね妥当と考える	◇継続して実施する。2学期は、達成指標の計測精度を増す。→**「論理的に解答する」生徒をどう測るか？を追究する** ◇短学活や授業等で、自己存在感を自覚する場を保証する。場の設定の仕方を工夫する。（挙手での発表以外も）できたと回答した生徒以外へ個別の支援を実施し、1学期からの変容を確認する。
多様な意見や考えを受け止め、建設的に発信し合意形成を図ろうとする力の涵養	○ 以下の調査内容（行事後・学期スパン）肯定率（４段階評価において3以上）を**８０%以上**にする 【生徒調査】平均87.5% ①授業を主体的に取り組み充実できていると思うか 92.9% ②自分の将来に向けて目標をもって学校生活をおくれているか。　75.0% ③互いの意見を受けいれよりよく学校生活を送れていると思うか。100% ④友だちや集団のために役に立てていると思うか。82.1% 【行事ふり返り調査】 ①行事の目的を理解し、達成感を得ることができたか。　92.6% ②行事を通して次への目標ややる気をもつことができたか。　92.6%	学校	○ キャリア教育の視点を意識し、生徒指導の3機能を担保しながら「生徒を主体としたきめ細かな授業実践」の推進。 ○ 教師は、生徒の多様な考えを引き出し主体性や協働性が発揮できるような場を学校生活全体を通して意識する。	○ 授業改善の推進 ・生徒が主体的に活躍できる授業を**毎時間**取り入れる。 （ペアー・小集団活動） ・生徒の特性に応じた授業展開の工夫。 （指導の個別化） ○ 生徒は、**行事等**に向けて学級・全体で話し合う場を**１回以上**もち、合意形成のもとに行事に取り組む。 行事ごとにふり返り調査を行い、生徒の変容を把握する。 ○			学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力、人間性等の涵養」	○江藤　光田　石松	○今回の調査では2学期末調査と比較して全体的には肯定的回答は向上しているがあまり大きな変化は見られなかった。 ○否定的な回答をする生徒もあまり変わっていない。「自分に自信がもてないのか」、「自己肯定感が低いのか」、「その他の要因：家庭生活・睡眠時間等」などあげられる。今後は、個の特性をどう生かすかや気になる生徒をどう引き込んでいくかなどきめ細かな指導体制、生徒指導の3機能を生かしながら更なる授業の工夫が必要だと考える。 ○調査の時期によって数値の変化が見られると思うが、全体的には今後も継続して学校の諸活動、教科・領域全般を通して自己有用感が持てるような取組が必要である。	100%	授業改善の推進を実施 ◇生徒が主体的に活躍できる授業を毎時間取り入れる。(ペアー・小集団活動) ◇生徒の特性に応じた授業展開の工夫。 (指導の個別化) ◇生徒は、行事等に向けて学級・全体で話し合う場を1回以上もち、合意形成のもとに行事に取り組む。 ◇行事ごとにふり返り調査を行い、生徒の変容を把握する。	100%	◇生徒指導の3機能を担保しながら生徒が主体的に活躍できる授業を展開している。 肯定的回答100% ◇ペアや小集団を活用しながらお互いを認め合える雰囲気作りや生徒が「できた・上達した」等を正しく評価し賞賛することができている。　肯定的回答100%	◇授業改善の推進については2学期も継続して取り組む。 ⇒更に保護者、地域を巻き込むことも必要 ◇生徒はふり返りを行うことで、行事に対して自分がどう取り組んだかを再確認したり次への目標が持てたりしていると調査結果から感じる。 ◇将来についての考え方。 自分が集団のために役に立てているという自覚を持たせることと自己有用感の向上を図る取組が必要。 ⇒取組継続の徹底 ◇合意形成の具体的な方法について(案) ⇒中央委員会(執行部＋学級正副委員長)で目的を提示し、各学級で朝自習時などを利用して、目的を発表。そこで協議したものを全体の場で発表し、全校生徒が周知した上で行事を行う。 +CSと共有、熟議へ	◇1学期はふり返り調査を2回実施していきた。生徒会からの提案を学年で話し合う場を設定するための時間の確保や合意形成を行う具体的な方法をどのようにしていくかが課題である。⇒さらに追究する ◇キャリア教育・進路学習を含めて将来の見通しを持たせることが大切。 ⇒CSの更なる活用へ ◇保護者アンケートにおけるコメントの変容に着目する
			○ コミュニケーション活動の積極的な推進	○ **学期に1回**コミュニケーションの状況を把握する						100%	◇　アンケート結果から実施状況を把握	100%	授業参観(学校開放日：毎日)実施		
		家庭													
		地域	○ 学校運営協議会を中心とした地域連携の推進	○ 地域は、学期に１回以上授業参観（行事含む）を積極的に行い授業評価をする ○ 運営協議会は年１回以上生徒が表現活動できる場を提供する						100%	◇学校運営協議会(8月下旬開催予定)で協議、熟議予定		2学期実施予定		

【成果】
○ 「自律した学習者」の育成に向け、基礎的な枠組み、構成の向上に進展
○ 授業改善の取組(互見授業など)が教師の専門性の向上とともに、生徒の学びに向かう態度の向上にリンクする傾向
○ 組織マネジメント(各チームの取組状況、役割等)の明確化 （チーム会議/月の実施による）

【課題】
△ 「論理的に解答する」項目における更なる精度向上
△ 更に家庭、地域との協働に注力すること